

障害者ほぼ終日閉じ込め／神奈川県立の入所施設／職員「虐待」と指摘

神奈川県立の知的障害者施設「中井やまゆり園」（同県中井町、定員122人）で、一部の入所者を1日20時間以上、外側から施錠した個室に閉じ込める対応が常態化していることが25日、共同通信の入手した園の内部資料で分かった。職員からは「実質的な虐待だ」との声が出ている。

施錠の対象は、自閉症で強度行動障害などがある入所者。同園の菅野大史（かんの・ひろし）園長は取材に対し、現在も3、4人を個室で20時間以上、施錠していることを認めた上で「行動障害がある入所者の安全のため、やむを得ない。短くするよう取り組んでいる」と話した。

同園は2016年に殺傷事件があった津久井やまゆり園と同じく県立施設。津久井園は県から委託された社会福祉法人の運営だが、中井園は県が直営している。

県は今年5月に「中井園で1日8時間以上、施錠するなどの身体拘束が2月時点で22件あった」と発表。うち2人については障害者虐待防止法に基づく虐待と認めた。

だが、内部資料では同じ2月時点で22人のうち5人が20時間以上施錠されていた。長時間の施錠が10年以上続いていた人も数人いる。園の複数の職員は取材に「県の発表は時間を少なく見せかけている。虐待と認定された2人と他のケースに実質的な違いはない。拘束が認められる切迫性や一時性などの要件を満たしていないのに、県立のため身内意識でチェックが働いていない」と証言している。

長時間の閉じ込めは津久井園でもあったとされ、殺傷事件の判決で横浜地裁は植松聖（うえまつ・さとし）死刑囚（31）について「利用者を人として扱っていないように感じ、重度障害者は不幸で不要な存在と考えるようになった」と指摘。

県の有識者会議は今年3月にまとめた県立入所施設全体についての報告書で「津久井園を指導する県自身が権利擁護に対する認識が低かった」としていた。中井園の職員は「障害者を人として扱わない県の体質が事件の背景にあったのに、変わっていない」と話した。

「ともに生きる」言葉だけ／鉄製扉、カメラ映像で観察

『「ともに生きる」というスローガンからは全く懸け離れている」。知的障害者を長時間、個室に閉じ込めている実態が明らかになった神奈川県立「中井やまゆり園」。取材に応じた複数の職員は、相模原の殺傷事件後に県が掲げた理念を挙げ、「事件の教訓が生かされていない」などと話した。

園には男女別に計七つの「寮」がある。内部資料によると、長時間の個室施錠が行われているのは、自閉症で強度行動障害があるとされた人向けの2寮が中心。それぞれ6～十数人

が入所する。

職員らによると、2寮のうち男性の寮の部屋は鉄製扉。鍵が二つあり、一つは外から施錠できるようになっている。職員は各部屋にあるカメラの映像を職員室のモニターで見ており、短時間の散歩や活動、入浴などのときだけ入所者を連れ出すという。

県は殺傷事件後、県立施設での入所者の待遇を検証。中井園で虐待されていたと5月に発表された2人は、この2寮の男女。住民票のある市がたまたま同じで、県から情報提供を受けた市が虐待と認定したという。職員らは「他市町からの入所者も実態は変わらないが、他市町は県の顔色をうかがって『虐待』と言わなかっただけ」と話す。

5月の発表後、園では8時間以上連続して施錠しないよう、数時間ごとに5～10分ほど解錠するようになったという。「ただ、声を掛けるわけではないので、入所者は気付かず、その間も部屋にいる。これで『長時間の施錠はなくなりました』と言うつもりだろうか」と職員の一部。

県は中井園を含む県立入所施設の在り方について7月から有識者委員会で議論しており、不適切な支援を問題視する意見が委員からも出ている。委員会は10月に中間的な論点整理をする予定だ。

必要性に疑問、人権侵害だ

強度行動障害がある人の支援に詳しい鹿児島大の肥後祥治(ひご・しょうじ)教授の話 自傷行為や暴れるといった強度行動障害は、元々の障害の特性がベースにはなっているが、周囲とのコミュニケーションがうまくいかなかったり、置かれた環境が合っていなかったりするために現れる状態だ。刺激を与える要因を取り除くなど、居室施錠以外の方法を先に考えるべきで、20時間も居室に入れておく必要性はかなり疑わしい。他の施設では聞いたことがない。虐待であり、人権侵害と言っていいだろう。

(共同通信 2021.9.26)